相手を意識したアウトプット活動の実践
～外国人留学生との対話を通して～

福政　純子
鳥取大学附属中学校　英語科
E-mail: fukumasa-j@tottori-u.ac.jp

FUKUMASA Junko (Tottori University Junior High School): **Research on output activities with an awareness of the people with whom you are interacting. ---Through talking with international students.**

要旨　－　本研究では，中学校英語の授業において，外国人留学生との対話やインタビュー，プレゼンテーション等の実際の交流が，生徒の英語学習への意欲や外国の文化への関心に与える影響について検討した。実際に外国人と交流することは，自分自身や自分の考えについて英語で伝える体験になると同時に，相手の国の文化や相手自身の考えを知ることになる。生徒達は，話す相手の文化的背景や相手自身の好み等を意識し，話す内容や適切な英語表現について考える。このような外国人留学生との交流を継続して実践した結果，多数の生徒の英語学習への意欲や外国へ興味関心が向上する傾向が見られた。

キーワード　外国人，交流，関心意欲，相手意識

Abstract —　In this study, we examined the effects of actual interactions such as dialogues, interviews, and presentations with foreign students in junior high school English classes on students' motivation to learn English and their interest in foreign cultures. Actual interaction with a foreigner provides students with the experience of communicating in English about themselves and their ideas, and at the same time, it allows them to learn about the culture of the other country and the other person's own ideas. Students are aware of the cultural backgrounds and preferences of the people they are speaking with, and consider what to say and appropriate English expressions. As a result of continuous practice of this kind of exchange with international students, many students' motivation to learn English and interest in foreign countries tended to improve.　The study examined the impact of making students aware of both the setting and the actual audience when giving a speech in a junior high school English class on their ability to express themselves. Through thinking about the situation and to whom they will deliver their speeches, students consider appropriate expressions and think of sentences with flowing content. In addition, by giving speeches in front of multiple people, students consider what is the best way to speak in a way that is easy to convey. As a result of continuous practice of these two types of speech activities with an awareness of the audience, a tendency for the expressive ability of a large number of students to improve was observed.

Key words — Foreigners, communication, motivation, partner awareness

1.　はじめに

中学校学習指導要領外国語編では，「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」（文部科学省 2018: 10）の育成を外国語科の目標としている。そして，育成を目指す資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力，人間性等」に関わる目標を，以下のように設定している。「(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め，聞き手，読み手，話し手，書き手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」（文部科学省 2018: 10）。

そのためには，英語を用いて外国人との交流体験をし，異文化理解を深めるとともに，自分について語り相手のことを知る機会をもつことが効果的だと考える。生徒は，様々な文化背景を持つ人々との交流を通して，「配慮」の仕方も異なってくることを学ぶことができる。また，生徒が主体的にコミュニケーション活動に取り組むには，中学校の基本的な言語材料であっても，自分の英語が相手に伝わるという成功体験を重ねることが自信へとつながるであろう。実際に英語で自分の思いや考えを伝える場面を何度も経験することを通して，学んだ表現を自分のものとして習得し，さらに英語を使いたいという気持ちが高まると考える。

今年度，鳥取大学附属中学校（以下，本校）では，学習した英語や既有の知識を用いてコミュニケーションを行えることを目標として，個人・協同学習を取り入れながら話す，書く等のアウトプット活動の場面を各単元に設定してきた。そして，アウトプット活動を通して，課題に向かって「主体的に」「対話的に」「深く」考えることのできる「やりくり授業」を実践してきた。

英語を使った外国人とのコミュニケーション活動を扱った授業実践は，全国で数多く見られ，松崎（2022）は，「「英語が嫌い，苦手」と感じている学生は，実際のコミュニケーションを経験し，成功（肯定的）経験をすることで英語に対するネガティブな感情が減少され」，「Authentic（本物）のコミュニケーションは，英語学習動機付けの要因の一つでもある異文化や海外への興味関心も高めていた。」と述べている。

また，金子（2020）は，「『英語好き』の傾向，留学生との『コミュニケーション』や異文化への興味，そして，『英語の必要性』の実感と『通じた』成功体験であり，これらが絡み合って英語学習へのやる気につながっている」と述べている。

また，金子（2022）は，「「もっと英語を話せるようになりたい」思いをどうやって醸成していくかも大きな課題である。同じ交流会を通しても英語を話せるようになりたいと思う生徒もいれば，そうではない生徒も存在した。なぜそう思い，思わないのか，その違いを生み出す要因は何かをはっきりさせることができれば，効果的なプログラムを組むことに大いに役立つであろう。」と述べている。

そこで，本研究では，生徒のやりくりとして，既習事項を用いて，外国人に自分の考えを伝える自己表現活動を進め，生徒の意識がどう変化するかを見取ることにした。

2. 研究の方法

仮説「外国人留学生との対話やインタビュー，プレゼンテーション等の実際の交流によって，生徒の英語学習への意欲や外国の文化への関心が高まるのではないか」

この仮説をもとに授業実践を行い，アンケート調査の分析から仮説の検証を行った。

2.1. 実践の対象および時期

実践の対象は，鳥取大学附属中学校 1 年生 141 名(4 クラス)の生徒である。外国人留学生との授業実践は 2023 年 6 月から 2023 年 12 月の間に複数回実施した。また，授業実践が生徒に与える影響について調査するため，7 月，10 月，12 月にアンケート調査を実施した。また，7 月の調査で英語の運用について関心が低い生徒を抽出し，全体生徒との比較やその後の変容について分析を行った。

2.2. 調査の内容

実践後，外国人留学生との交流学習についてのアンケート調査を実施した(表 1)。質問を以下に示す。

［アンケートの内容］

①英語を上手に話したり，日常で使いこなしたりしたいと思いますか。

②外国の文化に興味がありますか。

③英語を話すことは楽しいですか。
その理由（　　）

④授業中の会話練習に一生懸命取り組んでいますか。

⑤英語を書くことは楽しいですか。
その理由（　　）

⑥英作文に一生懸命取り組んでいますか。

アンケート調査は，4件法および自由記述とした。質問 1～6 では，「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」から1つ選択させた。質問 3 と質問 5 における理由は自由記述とした。また，12 月には以下の追加の質問を加え，すべて自由記述で回答させた。

［追加アンケートの内容］

1. 外国人留学生との交流を通して，自分にどんな変化がありましたか。
2. 英語を話したり書いたりする意欲にどんな変化がありましたか。
3. 英語で話したり書いたりするとき，伝える相手を意識して何か工夫しましたか。
   ・話すとき　・原稿を書くとき

(調査の内容)
①英語を上手に話したり，日常で使いこなしたりしたいと思いますか。
②外国の文化に興味がありますか。
③英語を話すことは楽しいですか。
　その理由（　　）
④授業中の会話練習に一生懸命取り組んでいますか。
⑤英語を書くことは楽しいですか。
　その理由（　　）
⑥英作文に一生懸命取り組んでいますか。

〈12 月追加調査の内容〉
1. 外国人留学生との交流を通して，自分にどんな変化がありましたか。　（　　）
2. 英語を話したり書いたりする意欲にどんな変化がありましたか。（　　）
3. 英語で話したり書いたりするとき，伝える相手を意識して何か工夫しましたか。
・話すとき（　　）
・原稿を書くとき（　　）

表1　アンケート調査

2.3. 実践の内容

授業実践は 2023 年 6 月から 2023 月 12 月の間に 6 回行った。その計画を，表 2 に示す。

授業実践の際に，特に注意して指導したことは以下の 4 点である。

1. 「誰に」「何のために」「何を」を明確にする。
2. ペア，班の活用
3. 既習文法，既習表現を生かす場の設定
4. タブレット端末の活用

2.3.1 「誰に」「何のために」「何を」を明確にする

「どこの国の出身の誰に何を伝えるのか」によって，伝える内容が変わってくる。伝える相手と，プレゼンテーションや対話の目的を明確にして，伝える内容を考えさせた。

2.3.2 ペア，班の活用

個人で発表原稿を書き上げた後，ペア同士で発表し，お互いにアドバイスし合うようにさせた。英語で話すことに苦手意識がある生徒でも，友達との練習を繰り返すことで楽な気持ちで活動に取り組むことができるようにした。

2.3.3 既習文法，既習表現を生かす場の設定

中学校 1 年生の今の時点で学習している文法事項は多くない。自分の考えを伝えるために，can，現在進行形，過去形，様々な疑問詞等をどのように使ったらよいかを考える時間を確保した。また，参考にできそうな表現は黒板や大型テレビに表示し，アウトプット活動へ生かすことを意識させた。

表 2　実践計画（交流する相手と目的）

月	交流する相手	目的
6 月	ガーナ出身留学生	好きなもの，趣味などの好みをインタビューする。
7 月	ガーナ出身留学生	Emma さんの好みに合った鳥取ツアーを提案する。
9 月	インドネシア出身留学生	好きなもの，趣味などの好みをインタビューする。
10 月	インドネシア出身留学生	おすすめのもの，場所について，1 対 1 で会話をする(2 分間)
11 月	オーストラリア出身教師	思い出に残っている出来事を発表する
12 月	ガーナ，インドネシア出身留学生	自分の冬休みの過ごし方についてのビデオレターを送る

2.3.4 タブレット端末の活用

対話やプレゼンテーションを行う際に，わかりやすく伝えるため，タブレット端末で画像を提示させた。また，「おすすめの場所」「好きな食べ物」等について英作文する際に，ロイロノートで提出をさせ，クラスメイトと共有させた。そして，ビデオレター作成の際には，自分の発表をタブレット端末で何度も録画し，後で1つ選んでGoogle Classroomで提出させた。録画した自分の発表を見ることを通して，自分の発音や話し方を客観的に見る機会とした。

図1　思い出についてスピーチ

図2　留学生との会話

図3　留学生へのインタビュー

3. 結果と考察

外国人との交流授業と英語に対する学習意欲についての関連を把握するために，アンケート調査の結果を用いて，次の内容について考察した。その際，6 月の調査の質問 1「英語を上手に話したり日常で使いこなしたりしたいと思いますか」で，「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答した生徒 13 人を抽出し，全体との比較も行った。

1. 全体の傾向，抽出生徒の傾向
2. 全体と抽出生徒の傾向の比較
3. 抽出生徒の「英語を話すこと」に対する自由記述の変化
4. 抽出生徒の「英語を書くこと」に対する自由記述の変化

3.1.1 全体の傾向

質問 1～6 に関する質問について集計し得られた結果を図 4 に示す。「とてもそう思う」を 1，「そう思う」を 2，「あまりそう思わない」を 3，「まったくそう思わない」を 4 として，平均値を算出した。数値が低いほど肯定的な回答が多いと考えられる。全体の傾向としては，質問 1，2，6 で数値が下がっており，肯定的な回答が増えていることが示された。中でも質問 6 の英作文に関する意欲について，肯定的な回答が特に高まっていることが示された。

項目ごとの回答の割合を見ると，質問 1「英語を上手に話したり日常で使いこなしたりしたいと思いますか」や質問 2「外国の文化に興味がありますか」では，回を経るに従い，「とてもそう思う」「そう思う」という肯定的な意見が増えている。外国人との交流を通して，言語や文化への関心が徐々に高まったということが言える。

また，質問 4「授業中の会話練習に一生懸命取り組んでいますか」では，数値にほぼ変化はないものの，肯定的な意見が多い。質問 6「英作文に一生懸命取り組んでいるか」では，数値が下がっている。授業中の英作文や会話練習を頑張っているという意識を持っている生徒が多いということがわかる。

一方で，7 月，10 月，12 月とも，質問 3「話すことが楽しいか」，質問 5「書くことは楽しいか」では，数値の変化がほとんどない。中でも，質問 3 では，回答の平均値が 2 強であり，外国人との交流を通して英語を話す体験が，すべての生徒を「楽しい」という気持ちにさせているわけではないということがわかる。以上より，生徒が，外国人との交流を重ねるごとに，外国語や外国の文化への関心が高まり，英語を日常で使いこなしたいという意欲が高まり，授業での活動への意欲も高まっていると推察できる。

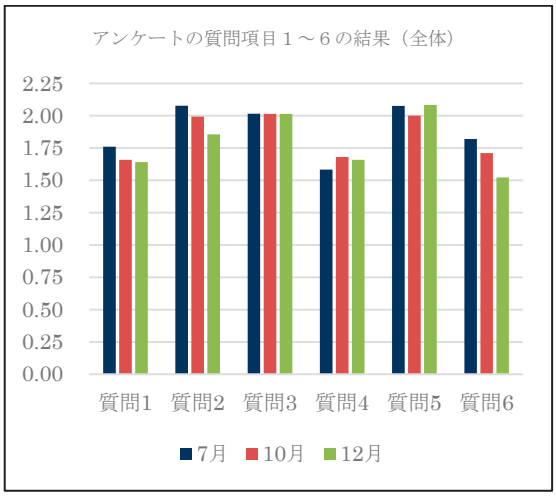

図４ １～3回のアンケート結果（全体）

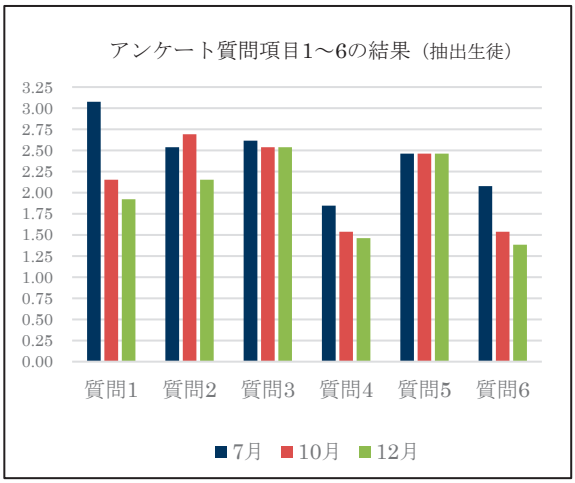

図５ 1～3 回のアンケート結果（抽出生徒）

3.1.2 抽出生徒の傾向

抽出生徒への質問 1～6 に関する質問について集計し得られた結果を図 5，6，7 に示す。前述と同様に平均値を算出した結果，7 月と 12 月を比較すると，質問 1，2，4，6 で数値が大きく下がっており，中でも質問 1「英語を上手に話したり，日常で使いこなしたりしたい」について，肯定的な回答が特に高まっていることが示された。7 月では肯定的な回答が 0 であったのに対し，12 月では，8 割弱となっている。最初は英語の運用に消極的であった生徒も，外国人との交流を通して，大半の生徒が英語をうまく使いたいという気持ちになったということが示されている。

質問 2「外国の文化に興味があるか」では，7 月では肯定的回答が約 45%であったが，12 月では 50%を越えた。さらに，「とてもそう思う」と回答した生徒が 7 月では 10%未満であったのに対し，12 月では約 40%となっている。これらのことから，実際に外国から来た人に接し，自国の文化を紹介してもらったり，実際に会話やインタビューを行ったりしたことにより，外国への興味・関心が高まったと言える。

一方で，7 月，10 月，12 月とも，質問 3「話すことが楽しいか」，質問 5「書くことは楽しいか」では，数値の変化がほとんどなく，

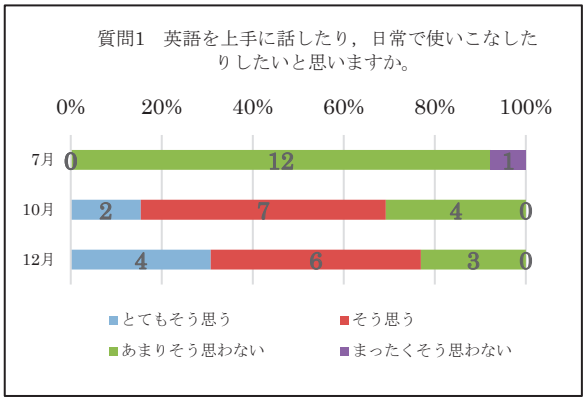

図６ 質問１の回答内容（抽出生徒）

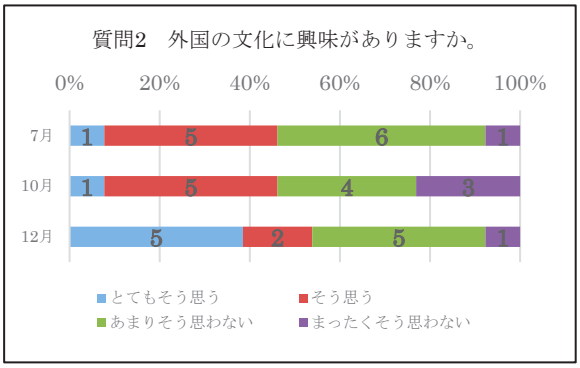

図７ 質問２の回答内容（抽出生徒）

外国人との交流は，生徒の「楽しい」という気持ちに大きく影響を与えているわけではない，ということが示された。

3.2. 全体と抽出生徒の傾向の比較

全体と抽出生徒のアンケートの回答の数値

の推移を図 8 に示す。その傾向を比較すると，大きな特徴が 3 点見られた。

質問 4，6 では，全体と抽出生徒共に数値が約 1，5 で他の項目と比べて低く，授業中の会話練習や作文練習への意欲が高まったことを示している。

質問 1「日常で使いこなしたりしたい」では，全体では最初から他の項目に比べて数値が低く，抽出生徒では回を経るごとに低くなった。英語の上手な運用への目標や憧れの気持ちが高まったことを示している。

質問 3「英語を話すことが楽しいか」，質問 5「英語を書くことは楽しいか」では，全体と抽出生徒共に数値にほぼ変化がなかった。外国人との交流は，生徒の「楽しい」という気持ちに大きく影響を与えているわけではない，ということが示された。

以上より，生徒が，外国人との交流を重ねるごとに外国語や外国への関心が高まり，運用への意欲が高まり，授業での活動への意欲も高まったが，「楽しい」という気持ちにはほぼ変化がないということが示された。

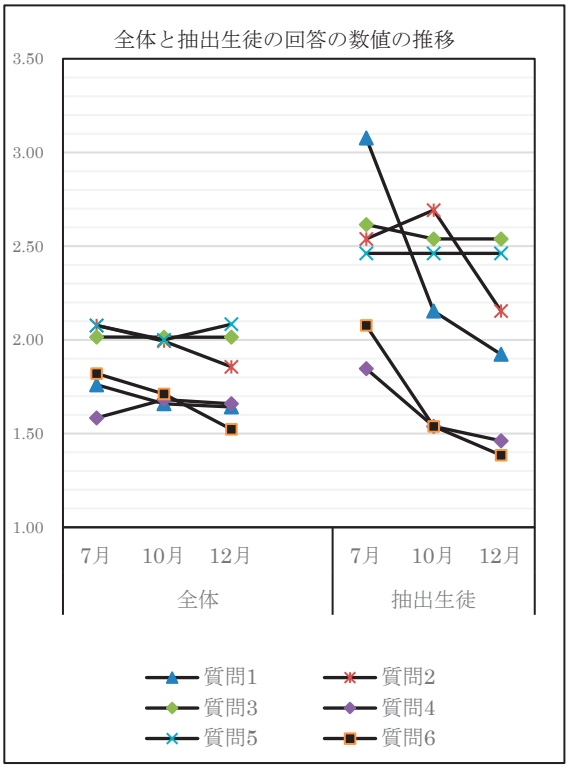

図 8 全体と抽出生徒の回答の数値の変化

3.3. 抽出生徒の「英語を話すこと」に対する自由記述の変化（質問 3）

6 月の調査の質問 1「英語を上手に話したり日常で使いこなしたりしたいと思うか」で，「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答した生徒のその後の変容を見るため，2 つの質問に絞って分析を行った。質問 3「英語を話すことは楽しいですか」質問 5「英語を書くことは楽しいですか」の回答と自由記述の結果を表 2，3 に示す。回答の肯定的部分を____，否定的部分を▒で示す。

表 3 1〜3 回のアンケート結果（抽出生徒）

③ 英語を話すことは楽しいですか。						
	7 月		10 月		12 月	
生徒	回答	記述	回答	記述	回答	記述
A	3	日本語でもそこまで楽しくない。	3	日本語で話す方が伝わりやすいし，聞きやすいから	2	分かったり話せたりしたら，「やったー！」と思う。
B	3	慣れないので，自分の思いが相手に伝わるかが不安になる。	2	まだあまり慣れていないから	3	難しい発音の時の，f や v などが発音できていない気がする。
C	3	発音が難しいから	2	日本語では使わないよう口の動きがおもしろい	3	発音など，あやふやな部分があるため。
D	3	いろいろなところが言いづらいから	2	新しいことが少し楽しい。言いやすい。	2	日本語より言いやすいから。
E	3	日本語で話した方が簡単だから	3	発音や文法をきちんと言えているか不安。	3	発音が上手ではないから。
F	2	発音が好きだから	1	普段とちがった言葉で新鮮な感覚で話せる。	2	かっこいい。外国人との会話が進む。
G	3	難しいから	3	何を言えばいいのかわからないから。	3	いざしゃべろうとすると言えなくなる。
H	1	単語や文を覚えられるから	2	英語を話すたびに，どんどん上手になるから。	2	楽しいと思うけれど，難しいから。
I	2	話せたら，何となく楽しいから	2	日本語とは別のおもしろさがあるからです	2	今まで話したことがなく，新しいことを知れる
J	3	覚えるまでが少し難しいから	4	そこまで英語は好きじゃないから	3	英語を話すことにあまり興味がないから。
K	3	上手でないから	3	英文が長い	3	発音とスペルがちがうから。
L	3	日本語にない発音が難しいから	3		3	難しいから。
M	2	発音とかいろいろ難しいけど，話せるようになりたいと思う	3	発音が難しい。長文は，どこで区切ったらいいのかわからない	2	発音よく話せたらうれしいから。

抽出生徒の，質問 3「英語を話すことは楽しいですか」に対する回答の数値と自由記述の推移を見ると，3 回のアンケートで否定的→肯定的に変わった生徒が 2 名，肯定的→否定的に変わった生徒が 2 名見られる。肯定的，否定的な回答の記述には，次のような理由が見られた。

〇話すことが「楽しい」理由
・おもしろさ，かっこよさ
・日本語にはない新鮮さ
・達成感がある
〇「話すことが「楽しくない」理由
・発音がうまくない　・あやふや　・不安
・難しい　・長い
・何と言ったらいいかわからない

生徒 A のように，7 月と 10 月には「日本語の方が伝わりやすいから，英語で話すことは楽しいとは思わない」と答えていても，12 月には「話せたら『やったー』と思う」と記述している生徒もいる。外国人と英語でコミュニケーションすることで，自分が言いたいことを伝える楽しさや達成感を味わうことができ，それが自信につながったと考えられる。

一方で，生徒 H のように，10 月のアンケートでは，「話す度にどんどん上手になるから，英語を話すのは楽しい」と答えていても，12 月には，「楽しいが難しい」という記述をしているケースもある。英語で対話する機会が増えるほど，英語で自分の考えを伝える難しさを感じていると考えられる。

学習が進むにつれ，様々な英語表現を学び，語彙も広がることで，日本語にない新鮮さを感じたり，相手に伝える達成感を感じたりする生徒がいる一方で，話す際にどんな単語や文を使ってよいかがわからないという不安を抱えている生徒も多い。そして，「あやふや」という回答もあることから，はっきりと「できているのかわからないこと」が不安や満足度の低下につながっていると考えられる。

3.4.抽出生徒の「英語を書くこと」に対する自由記述の変化（質問 5）

13 名の生徒の，質問 5「英語を書くことは楽しいですか」に対する回答の数値と自由記述の推移を見てみると，3 回のアンケートで否定的→肯定的に変わった生徒が 2 名，肯定的→否定的に変わった生徒が 2 名見られる。肯定的，否定的な回答の記述には，次のような理由が見られた。

〇書くことが「楽しい」理由
・かっこいい，便利・英語を書くのが楽しい
・単語を覚えられる
・日本語にないルールがおもしろい
・書けたときの達成感
〇書くことが「楽しくない」理由
・難しい　・長い　・文法で混乱する
・慣れない　・日本語と違う
・単語を覚えるのが苦手　・興味がない

表 4　1～3 回のアンケート結果（抽出生徒）

⑤　英語を書くことは楽しいですか。						
	7 月		10 月		12 月	
生徒	回答	記述	回答	記述	回答	記述
A	3	日本語を書いても楽しくない。	3	難しいから	3	日本語の方が書きやすいし，わかりやすい。
B	3	あまり慣れないから。	2	英語を書くのが好きだから。	3	文法で混乱するときがある。
C	2	英語は丸い形をしているものが多くおもしろい	2	文章を書いたりするときにすばやく書けて便利だから	1	アルファベットの形がおもしろいから。
D	2	何か言うときに文法を使うから	3	とても難しいから。また，英語は大きく変えないといけないから	3	不規則なものや，知らない単語がたくさんあるから。
E	3	日本語の方が楽だから	2	自分の成長を感じることができるから。	2	覚えたことが結果にすぐにでるから。
F	3	単語を覚えて書く，ということが苦手	2	外国にしかない法則などがあり，学んでいて楽しい。	2	普段と違い，新鮮で楽しい。
G	3	難しいから	3	普段使っているのが日本語だから。	3	単語が頭から抜けて，手が止まって書けなくなる。
H	1	何回も書くと，スラスラ書けるようになる	2	何回も書いたら，教科書などを見ずにスラスラ書ける	1	何回か書いているうちに，すらすら書けるようになる
I	2	単語を覚えられるから	2	単語を覚えられるからです	2	英語を書けるとすごいから。
J	3	覚えるまでが少し難しいから	4	そこまで英語は得意じゃないから	3	英語を書くことに興味がないから。
K	3	文が長い	2	書くことが苦手，スペルミスが多い	4	長い。覚えづらい。
L	2	きれいに書けたらうれしい	3		3	単語が難しいから。
M	2	覚えるのには時間がかかるけど，できたときの達成感が大きいから	2	習った英語をスラスラ書けるとかっこいい。難しいけど書けたときはうれしいから。	2	文法を使っていろいろ書けるといいから。

生徒 E，F のように，7 月には「『日本語の方が楽』『単語を覚えて書くのが苦手』だから，英語で書くことは楽しいとは思わない」と答えていても，10 月，12 月には「『成長を感じる』『結果がすぐにでる』『新鮮だ』から，書くことは楽しい」と記述している生徒もいる。

一方で，生徒 D，L のように，7 月には「『文法を使うから』『きれいに書けたら嬉しいから』英語を書くのは楽しい」と記述していても，10 月，12 月には「『とても難しい』『（語順を）大きく変えなければならない』」のを理由に，英語を書くのは楽しくないと回答しているケースもある。

英語をすらすら書けることに満足感を感じている生徒も見られ，大変だが書けたときの達成感が大きい，と感じている生徒もいる。しかし，学習が進むにつれ，英文を書く際に日本語との文法の違いや単語の難しさに苦労することが増え，「楽しい」という気持ちが低下したことが見てとれる。

4. まとめと今後の課題

本研究では，外国人との英語を使った交流を 6 回実施し，実際の交流によって，生徒の英語学習への意欲や外国の文化への関心に変化があるかに着目した調査，分析を行った。その結果，英語を用いた会話やプレゼンテーションは，生徒達の外国語や外国の文化への興味を引きつけ，さらに英語をうまく使いたい，学びたいという意欲を高めていることが示された。12 月の追加アンケートの記述には，「外国の文化に肌で触れておもしろかった」「外国人に伝わる英語を話したいと思うようになった」のように，交流を楽しみ，外国への関心の高まりをつづっているものが多く見られた。

実際に英語を使ってやりとりすることを通して，生徒達は授業中の書いたり話したりする英語の「学習」に意欲が高まってきた。アンケートにも，「実際に話してみて，自分の英語の発音と全然ちがったから，１音１音に気をつけようと思った」「もっといろんな英語を学んで，たくさんの人と関わりたい」と，学習意欲について書いていたものも多かった。

今後の課題としては，英語を話すこと，書くことが「楽しい」と感じている生徒は多くないことから，日本語と英語の発音や文法の違いや単語の多さから，生徒が不安感を募らせ，自信を失っていることを考慮に入れ，今後の授業を考えていく必要がある。英語で原稿を書いたり，会話をしたりする際の間違える経験や外国人と対面するプレッシャー，思春期ならではの恥ずかしさなどが，「楽しい」という気持ちを遠ざけてしまっていると考えられる。

今後は，英語に苦手意識がある生徒にとっても，英語による交流が「わかった」「話せた」「伝わった」という達成感につながるように，活動を工夫することが大切である。例えば，それぞれの生徒達が自分の目標を設定し，それに向かって学習を進められるような活動を設定することである。「自分の目標を達成できた」「前回よりできるようになった」というスモールステップで自分の成長を確認することが英語を使うことの自信となる。ルーブリックの活用，振り返りシートの工夫など，個々の生徒が技能的な成長を感じられるよう，授業での手立てを今後も研究していきたい。

参考文献

文部科学省（2018） 中学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編

金子 義隆（2020）「中学校異文化交流の効果検証」 明海大学教職課程センター研究紀要 2020 年 3 号 p. 13-24

金子 義隆（2023）「中学生の英語学習動機を高める要因 : 留学生との異文化交流会の効果再検証」 明海大学教職課程センター研究紀要 2023 年 6 号 p. 1-17

松崎 久美（2022）「海外の学生とのオンライン交流が英語学習意欲に与える影響」名古屋芸術大学研究紀要第 43 巻 p.113-124